

V  
O  
I  
C  
E

三  
条  
万  
里  
子



# 目次

一つの種が胸に	6
結婚	8
守り神	10
天からこぼれた・・・	14
自由解放	16
アルヴァイン・エイリー	18
贈りもの	20
作品「舞踊論」シリーズ	23
その虫・・・	26
光の中で踊る	30
午後の会	32

ダニエル・ナグリ	34
作品「タマゴ」	36
作品「対話」	40
黒衣 <small>くろのこ</small>	42
作品「VOICE VII」	45
聖なる踊り	50
花の書	53
能舞台に立つ	56
鬼を踊るのは今	59
作品「径」 <small>パソージュ</small>	62
旅しあとがきにかえて	64



## 一つの種が胸に

あ の とき、確 かに 時 が 止 ま っ た の だ っ た。

白 い 壁 に は ア ル ブ レ ヒ ト ・ デ ュ ー ラ ー ( 1471-1528 ) の 木 版 画 三 点  
が ひ つ そ り と 掛 け て あ り、一 種 の 冷 た い 神 々 し い 底 光 り を 発 し、ふ と  
目 を や る と ヒ エ ロ ニ ム ス ・ ボ ッ シ ュ ( 1450頃 - 1518 ) の 画 集 が そ こ に  
置 か れ て い た。

硬質な巖<sup>い</sup>しいデューラーの版画：天国と地獄がもろともに描き出されたボツシユの画集：何かの符号か？

どうしてそれらがそこに：訝<sup>いぶ</sup>しく思った。

午後の光がゆつくりと射し込んでいて、吸い込まれるように立ち尽くしていた私の耳から、すべての音が遠のいた。

その場、その時、私の進む道が一直線の道のように決まった。

## 結 婚

私の結婚への序曲は、旧約聖書を読むことから始まった。宗教的に厳しいユダヤ家系の掟。ユダヤ人としての正式な「洗礼」を受けなければ結婚が許されないからであり、三人の聖職者Ⅱラビ寄りの質問にパスしなければ「洗礼」は受けられない。

「私は結婚するのにも試験される：！」と叫んだが、次々と眼前に広げられた海図と羅針盤の動きに従った。

アメリカ＝自由の国で、私は社会制度の掟にしっかりと取り押さえられた。

しかし、くるべきものが来た！ という予感もあつた。

ひとつの突破口！

## 守り神

小辻誠祐博士（1899-1973）よくぞこの方に出会えた！当時七十歳。

紛れもない明治の学者で、実に清楚で静かな方であるが、青年のような義憤を胸に秘められていた。私のユダヤ教の勉強の為、家庭教師として夫ウォレンから紹介された。以来、子供たちのガッド・ファザーであり、私たち家族の守り神である。

明治生まれの学者で『ヘブライ語原典入門』『ユダヤ民族』etc.の著書があり、京都の宮司の家系に生まれながら、キリスト教の牧師、明治大学教授。五十歳にユダヤ教に改宗され、高位聖職者（ラビ）になられ、当時ニューヨークに在住しておられた唯一の日本人ラビだった。

ナチと協調していた当時の日本政府との難しい中で、満州在住の頃、数万人ものユダヤ難民をアメリカやイスラエルに渡航させる道をつけられた。その後もリトアニアからのユダヤ人を乗せた船の船舶許可に奔走された。アメリカやイスラエルに無事に辿り着いた人々から

「命の恩人」として尊敬され、ユダヤ人救済に命をかけた日本人であった。

今は、こよなく愛したエルサレムの地と人々に迎えられて石の墓に眠る小辻博士。ちょうどワルシャワのシンドラールと同じように…。

後に出版されたNHK出版『命のビザを繋いだ男 小辻節三とユダヤ難民』山田純大著を参照。

イスラエルに二年続けて公演の招聘を受けた私は、二度とも夫と共に墓参りをした。私たち父母四人の記念の「木」も数本、イスラエルで今、葉をそよがせている。

天からこぼれた・・・

小学校一年生の時、隣の席にいた菊江ちゃん。いつも黙ったまま、画を描く。それが何を描いてもずば抜けてうまい！「天からこぼれて生まれたのだ！」と、そのとき、私は思いこんだ。

その後、一生涯かけても到達できないほどの仕事をした、多くの発明家、科学者、アーティストたち。天からこぼれて生まれた人々……。うらやましく思いながらも、その恩恵を存分に受けた。

若いときには、ただ暴れていたただけだった私の踊り。五十歳にしてやっと人のかたちになれたと思ひ、その時にスタートラインに乗れた！という実感がある。

そしてすぐに、死に追いつかれた。

## 自由解放

人の本能のリズムを引き出すことを目指した、リトミックの創始者  
|| スイスの作曲家 || エミール・ダルクローズ (1865-1950) は、「音楽  
を耳でなく筋肉で聴け」という。その教えは大きく私に響いた。それ  
こそダンサーのための金言。

今にして思う！ 一世紀も前に生きたダルクローズの弟子だった！  
と。

また、形式化した古典バレエの改革。女性の体をコルセットから解放。意識も「自然に帰れ！」「個の叫び」を唱え、女性解放のパイオニアになったイサドラ・ダンカン（1872-1927）。

その種は、生きて根を持つて、現実を試しながら私は生きてきた。

生まれたのが一寸遅ければ、現代のメカニクな世界に、昭和一桁のこの肉体は巻き込まれたであろうか――。

## アルヴィン・エイリー

きらびやかに復興した日本。華やかな世界中のダンスフロームが、連日あふれる洪水の日本。

一九六二年四月、突然、眼前に現れたのが「黒人霊歌」を踊るアルヴィン・エイリー（1931-1989）（Alvin Ailey）の姿。その感動の波動が彼との出逢い！七月には、私はニューヨークにいた。

マリア・アンダーソンが唄う「深い川」が、すでにダンスで立ち上がっていた！

代表作「啓示」「レボリューション」は、彫刻的な様式で始まったが、遂にフォームを突き抜けて「黒人の叫び」に転化し、最後は陽気に狂って踊りの原型をつきつける。作品「ブルース組曲」と共に。

観客を、いやがうえにも、ある次元にもっていく時間と空間の構成。ブラックパワーと共に成長し、観客もレパトリーも増し、確実にアメリカを代表し、世界中で公演を重ねたアルヴィン・エイリー！

## 贈りもの

来る日も来る日も稽古場いっぱい汗を撒き散らして体と格闘していた二十代の私たち。

アルヴィン・エイリー、その人が渡米の機会を私に与えた。

洗練された従来の美を、くつがえ覆す力。凶暴なまでに現れる内的エネルギーに満ちた、その即興のダンス！

他人の眼を気にしすぎ、あからさまな態度を抑えるのが美德。その日本人気質旺盛な自分を、あんなふう自由に表現できるもの…。その思いが一途に私の中で燃え上がった。

意識と無意識の間から立ち上がる偶然性を、私が捉<sup>とら</sup>えることができ  
たのは、あの夏の日に狂ったように踊っていたアルヴェインからの贈り  
もの。

日本人である私の創作の方向も、そのとき、きつちりと気付いた。

みんな貧しかったあの頃、遠慮する私をレストランに連れて行き、大きなビーフステーキを一つ注文すると、黙って私の前に置き、私が食べ終わるまで、大きな眼でじーっと見つめていた。その眼が、私から離れない…。

## 作品「舞踊論」シリーズ

「舞踊」とはなんぞや？

カリカチュア風にし、自分をも含めて右往左往するおかしさ―。  
作品「舞踊論」シリーズのはじまり。世はハプニング的要素に満ちた、  
そんな時代の産物。その頃の私は、反逆的で怒っていた。第二、第三  
はニューヨークで。しかし、こんなイタズラのできたニューヨークは

自由で楽しかった。今、考えれば、あの人混みと忙しさでの観かん違ちがい——だと。エンターテイナーの資格など、私にある筈もないのに。

一九六八年、一作目は日本で、当時流行り始めたアニメ映像、新聞用の活字体の「舞踊論」の文字をさまざまに分解したその映像との掛け合いで踊るスキнкаラータイツ姿で動く男女三十名。風に吹き飛ばされたり、押しつぶされたり右往左往の動き。

二作目、三作目は数年後にニューヨークで。有名なミュージカル「コーラスライン」や有名なマーサ・グラハムメソッド。または人間を果

物や野菜のように山積みしたり、押し潰したり……。日米双方の批評家の言葉のインタビュ録音、デイクシヨナリーの言葉、の繰り返し。有名な舞曲、そして「踊る阿呆に見る阿呆……」も！

今にすれば、こんな吐き出しをしなければ、次のステップが踏めなかつたことを悟る。

その虫・・・

「スミマセン……」の可愛い声で、娘まゆの日本語第一声。驚いた私！  
連発していた私の言葉。昼夜たがわず傾けても間に合わなかった子育てと舞台の仕事。

結婚と舞台。孤戦奮闘にもかかわらず、私には手助けも支援も必要！しかし、十年後には遂にすべてを一人ですることに決めて、切り替えた。

二人の子供たちが人の助けをあてにする “寄生虫人間” になってしまう。すでに踊りで生きてきた私は、それに近いことを。多くの人の助けがなければ、舞台に立つことは：（難しい）。

「芸術家アーティストは宮廷のピエロ」とアイロニカルに云ったゲーテの言葉は、二十一世紀でも立派に通用する事実。

ふと思いついてしまった！

若い頃、日本風の固い頭の私は、新しい自分の理想とで、いかに悩んだか――。

魅力のある人に出逢う度に、「ダンスを止められるか？」「その方のお世話を一生涯できるか？」自分に訊く。どうやら上手に避けて通り過ぎしたが、考えれば、今の自分は、努力したつもり（主婦業？）が、やはり半分は「その虫」になっていた！

もう、苦笑いで誤魔化す以外はない！

## 光の中で踊る

二人の子供と遊びながら過ごした日々、様々な綴ったエクササイズ  
の集積を日本で公開した。

ダンサーの日常の練習そのものをパフォーマンスにすることが、私  
の選んだ「新しい公演」の形だった。

一九七二年の秋、陽光あふれる芝生、十分なフロアスペースの空間がある赤坂のドイツ文化センター、「光の中で踊る」と題して、五日間毎朝、午前中に――。

ステージと客席を逆にして、舞台側から観おろしてもらい、バッハの無伴奏チェロ組曲を途切れなく一時間二十分、稽古着姿の七人のダンサーと踊った。

## 午後の会

ニューヨークに戻った一九七三年二月に「午後の会」と題してアル  
ヴァイン・エイリースタジオで四十分に短縮した、同じ趣向のものを二  
人で踊った。つづけてダンスマガジンのディレクター、リディア・  
ジョエルからの依頼で、パフォーミング・アート・ハイスクールで三  
日間。追加の要望で舞踊科、音楽科、演劇科、その卵たち、の前で踊  
った。みずみずしい若者の拍手は、ニューヨークの象徴とさえ思った。

筋肉と関節のそれぞれが、すみずみまで解放されることを希った「肉体の自立」を目指す。「内観法」の新しい試み。以後、決して止むことがない観測。

後に数十年にわたってセミナー、公演を続けられる基は、二人の子供の成長と共に、私も大きく舞踊を成長させられるチャンスがあったこと。若い時はよかった！と思う。

そして今も、しっかりと老いの学びがあることを！

## ダニエル・ナグリ

一つの舞台を、たったひとりで踊りきれぬ人は、ニューヨークでも決して多くない。知る限りでは、イサドラ・ダンカン（1877-1927）の作品を紹介するアナベル・ギヤミソンとユダヤ系アメリカ人ナグリ（1917-2008）。カーク・ダグラスに似た渋味、六十歳に手の届く彼は、ソーホーの自分のスタジオで度々、公演をした。

最も有名で、教科書に写真入りで紹介された作品「ストレンジ・

ヒーロー」。オドオドしているチンピラが、見栄を張り煙草を吸った  
りピストルにびくついたり、猫のようにスニーキーな足取り。性格派  
アクターの妙味。ジャズを実に小粋に踊る。アメリカ人でなければ出  
せない味が光る。

思わず、すぐさま日本に紹介したが、ソロコンサートが確立されて  
いないため、観客動員を危惧して、エージェントは私とのジョイント  
コンサートの切り替えた。一九七六年夏、東京で二日間。大先輩との  
ジョイントに慌てた。旧作「土偶」と、日本では初めて踊る作品「鳥」。  
そして新作「タマゴ」を、ダニエルの八曲の小品と共に――。

## 作品「タマゴ」

「タマゴ・タマゴ・タマゴ」と繰り返して歌う、娘まゆの声の録音と共に二人の子供の手をひいて舞台に昇った。大きな舞台には、小さな子ども用の椅子二脚。新聞紙とフライパンと男性一人（黒衣くろい）に、舞台の床に生卵立てを依頼。それは私の影、分身、監視人、或いは動くオブジェとして。

二人を椅子に坐らせ、お菓子を渡し、ガウンを脱いでエクササイズを始める。まゆは、おとなしく椅子に坐り、お菓子を食べる。息子サムは、不思議そうにキョロキョロと周囲を眺め、遂に客席側に近寄り、観客を眺め、笑う観客と共に楽しそう。。。

やがて食べ終わったお菓子の小さい包み紙を私に返してきて、「マミー、もう帰ろう！」と云う。やがて、バタバタと走り、舞台脇の友人の胸に飛び込んで二人は退場。。。

五、六分、充分な時間が経った。自然体の子供の仕草。私の計画は無事に終わった。

しかし、この時の偶然に始まった黒装束の「アイ.ディ.ア」。

この「タマゴ」の新作を経なければ、その後の作品「  
V O I C E  
シリーズは、きっとできなかつたのかもしれない。

## 作品「対話」

一九七五年、作品「鳥」の初演以来、俄に公演依頼と新しい「内観法」のクラスが増し、周囲に若者、その要望で仕事が増した。

作品「対話」Ⅱヘンリー・カウエルの曲で私の唯一のデュエットであり、既に二、三回上演したが、黒衣の衣裳で男女に踊ってもらった。頭巾で顔は覆われ、手と足だけのため、シンプルなその動きは大きな効果が現れた。それは、<sup>て</sup>掌を瞬間に重ね合わせる「象徴的な型」のラ

「ブダンス」であり、表現主義者、社会派の大御所からタタカレた作品であった。

アメリカには、浮世絵や屏風びょうぶのコレクターは多いが、ニューヨークでは、SONY、HONDAが真っ盛り。象徴美のダンスは、多分、奇異に感じられ「もっと体と体がぶつかり合うのが愛ラブだ！」と。表現派が多い社会すべてが露出狂的な現代――。

私の血は日本人。確かに日本人だ！と、この作品で確認できた作品であった。

## 黒くろ 衣い

舞台左右の袖幕とホリゾン幕のすべてを取り外した、剥き出しのコンクリートの壁にぴったりとよく似合う黒衣。既に十二、三人の群れが私の脳裡で動いた。周囲にいた若者は、ニューヨークに集まる舞踊家であれば、人種も容姿も異なる。一人ひとりの個性もあれば、かつてノイエ・タンツ（富国強兵的思想から生まれた）の流れのような群舞は決して生まれない。

“振付する。”という考えは、しつかりと消え、私は大きく転換した。  
演出の意図を伝えれば、素晴らしく開花する。

日本の遠い昔の盆踊り——先祖の亡者と共に踊るといいう西馬音内の  
：記憶の片隅から俄に作品が立ち上がった。亡者のような“影絵”の  
かたち——。

抜群のアイディア！

おおー神様！ 俄かに奮い立った。

慌てて追加の衣裳を注文、出来上がりが待てなかった。黒衣は見えないもの——という約束事の上で成り立っている独特な歌舞伎の装束しょうぞく。役者を助ける裏方の衣裳だが、私はそれを主演にした。

眼に見えない人の魂スピリットを、動きの抽象性と象徴性を、この顔なしの黒衣の装束ほど、ものを云う衣裳はない。この姿を舞台に乗せるだけでも、動く装置、場面の切り替え、心理効果も上がる。アイディアは尽きない！

作品「VOICE」シリーズの始まり。七曲の連作として続いた。

## 作品「VOICE VII」

黙々と歩みを進める人々の長い列。どこから来てどこに行くのか：山あり、谷あり、道なき道をも人は行く。そんな姿を私は作品にしたかった。

動きは一人一人のもの、それぞれの創意によつて自由に振る舞つてよい。一歩一歩がフィルムの一コマを見るように、ストップモーションを取り入れた動きをリズムミックに踊ることが条件。曲のリズムを活

かすムーブメントなら、拍数を引き伸ばしても刻んでも、ゆっくり進んでも前の人を追い抜いてもよし。しかし、宇宙の法則でもあるかのように、原則として、必ず運命きだめられた軌道を進む。

世の習わしに従ったり、あるいは背いたり、笑いころげ、惑い、転び、時には寝てしまったり、怠けたり、喧嘩もして逸脱したりもするが、その歩みは、歩み固められた先人の道を行く。

誰かが止まると全員が立ち止まり、一切の動きをしないという時間の止まる瞬間も挿入。そして、また誰かが歩き出すと皆がそれに続く。

数人の子供と犬も――。総勢六十名にも膨れ上がった。螺旋階段や天井からの吊り梯子も使用した。

やがて人々は重なり合ったり、うごめいたりしながら地に沈む。それぞれが這いながら、黒装束を脱ぎ捨てて、円形劇場の中心に円形の軌道をつくる。

黒い輪が出現。徐々に現れる黄金色の生命。いのち（仮面と、肌色・黄金色の様々な衣裳の重ね着）

新しいいのちを得た人々は、再び列になって歩み、舞い始めた。いたずら悪魔や、神になるシーンが巡り、舞い上がるベージュの色の仮面たちの群れ。

曲は十三世紀の宗教音楽。六人のボーカルに弦。声々と共に黄金色に光輝く舞台は、次第に赤々と燃え上がる炎のように揺らめく中で、尚も仮面の人々の列が途切れずに舞い狂うシーンを、ゆっくり、ゆっくりと闇の中に溶け込ませて作品は終わる。

人の群れに宿命の匂いが立ち込める。

宿命の先廻りを試みるのに、  
DANCEはどれ程の光をそえてくれ  
るか：。

## 聖なる踊り

カスピ海のほとり、アルメニアに生まれ、中央アジアからインド、チベットを放浪しながら真理を求め、体を、精神を一つにすることを目指し、活動を展開したグルジェフ。その足跡は、フランス、イギリス、アメリカまで及んだ。二十世紀半ばに少数ながら、意識の革命家に大きな影響を与え、熱烈な信奉者を生んだ。

写真も映像も極めて少ないが、一九九〇年夏、私はニューヨークの

試写室で「セークレットダンス」（1989年制作） ジャンヌ・ド・サルツマン監修のフィルムをみた。それは演出家IIピーター・ブルック（1925-2022）の友人であるイギリス人とフランス人との協同製作によるものであったが、まさに「聖なる踊り」であった。

ゲオルギー・イヴァノヴィッチ・グルジェフ（1874-1949）の遺産。  
得難いものを見た。

群舞の隊列が、刻々と迫り、極度にシンプルな動きが輝きの中に冴え渡る。静的な暴力とでも呼びたいほどのインパクト。あんなにも虚飾を剥ぎ取った人の姿があらうか。素朴でしかも洗練された人の佇まいがあった。秘境の僧院で踊られたであらう。そのものに揺さぶりをかけられた。深い敬意を覚えた。

## 花の書

“死”と隣り合わせに生きる人の“生”のドラマ。

有から無に至る道、死の予兆、死からの復元。そして「序破急」。  
主観と客観の関係を、稽古と演出の積み重ねから書き綴った書物、

「花伝書」。

その文字から、世阿弥が何度も立ち現れて私に迫った。

西欧の文化に氣を奪われて、多くの表現の氾濫に悩みぬいていた私の眼は、びたつと日本人の血と文化にきらめく十四世紀の大芸術家Ⅱ世阿弥に吸い寄せられた。

精神と体を一つにしぼった洗練された演者の挙動。岩石や瓦礫がれきから純金を取り出すように―また職人の熟練が作り出した道具のように。体の技芸は、声や振る舞いの中にそれを結晶させる。

日本に伝わる体の技芸や武道はその出来栄えや勝負ではなく、体の正しいあり方によって心が開かれてくるといふ理想に向けられた方法であるように思われる。

“誕生”から“死”へ、を生きる人の意味が隠されているように思える。

「芸の花」「人の花」は深い。

## 能舞台に立つ

神を招く笛の音が空を切り裂く。

能楽笛方藤田流十一世宗家が鳴り響かせた凄まじい音。その時、熱田神宮能楽殿での公演企画に招聘された。

「能舞台との交響」三條万里子 幽玄空間に舞う」

一九八七年、五十四歳の秋に、私ははじめて能舞台に立った。自分の体を異次元に放り出すつもり「鳥」。真の闇の怖さがそのまま現れるよう、きつちりと布地で目隠しをした。神経だけになったような重さのない体を幾度も体験した。舞台に込められていた先達の力を存分にいただいた。

丸一年を経て、再び藤田氏の申し込み。それは新しい劇場の柿落こけらおとしてあり、今度こそ能楽のシテ方、笛方、鼓方との共演であるという。一年前の申し越しの、私の逃げ出していた仕事だった。

最初から危惧していたことが現実になり、窮地に立たされた怖い舞台だった。

稚児のイメージ「翔」は急遽、鷹のイメージを持つ「翔かけり」に変えた。まさに地獄への翔かけりだった。

生死の狭間はざまに立ち合う魂を呼び起こそうとするようなものは、個人の体験や感覚を突き抜けた次元で結ばれ、成り立つのであろうか。

## 鬼を踊るのは今

一九九四年二月に、世界の「悪霊」の研究を発表するシンポジウムがニューヨークで開かれた。「悪イーヴィルコスミックシャドウ：大いなる影」と題してパフォーマンスを交えたものだった。その記録として一冊の本も作られた。

六十歳を越した私は、ニヤリとしてこのパフォーマンスの仕事を引き受けた。自分の中に潜む、何か見えにくいものには魅力があり、それを追うことで時を重ねてもきた。自らの欲望―繰り返し返される終わり

のない戦い。体の髄から湧き起こる震え。その醍醐味そびが首筋まで上がると、自然にほくそ笑みに変わることを自分でも判っていた。「踊っているとき、ただただ般若顔になる」と、人から言われたこともある。

依頼を受けたとき、すぐに私は自分の手や足の相を凝視した。鬼を踊るのは今……ふさわしい、と。

マンハッタンのモダンな教会の階段舞台には、聳そびえ立つ高い天井から鋭い白い光がいく筋も落ちていて、下段のひとわたりわたりに鏡を敷き並べ、覗き込む白い面が照り出される仕組みにした。狂女の鬼は彷徨う

ように、体を風にまかせるよう振る舞った。その時のディレクター、高齡のマリー・ホワイト教授は、数ヶ月後に他界された。戦前に日本に行かれた東洋学専攻イーストエイジアレンスタディの学者、鬼は最後のテーマだったのであろう。

私は自分の中の鬼とか、悪を正視できず逃げきれないのに逃げ回って生きてきた。そんな私に鬼を踊る資格があったのだろうか…。

苦い思いが残った！

## 作品「バツセージ徑」

正倉院の楽器や、古代ギリシヤの楽器の音色がここでも時空を超えて甦り、私の皮膚に沁み入った。鳥養トリかい潮のうしお「声明」。

一九九六年の夏に「バツセージ徑」と題して、東京と名古屋で上演した。

冥界につづくびやくどう〈白道〉を、列になってたどり歩く。あるいは駆け抜けて行く、目を覆った白装束の女性二十人の群舞。

しこの作品で、私は創作の幕を閉じた。

「旅」あとがきにかえて

夜明けに見た短い夢：不意に右手が重くなり、一方の手でそれを支えた記憶が体に残る。その夕刻にアルヴィン・エイリーの悲報が電波で世界中に飛んだ。

一九六〇年上半には「私は既にファクトリーだ！」と云った彼の声が耳に残っていて、ずーっと気がかりだった。初期のあの輝かしい黒

人アーティスト。あのパワーが遂に戻らず逝ってしまった彼を思うと、ただただ悲しい。

アーツの企業化は、諸々の宗教と全く同じだ！

ルドルフ・ヌレエフ（1938-1993）、モーリス・ベジャール（1927-2007）のカンパニーのダンも、私のパートナーだった。ルイス・ファルコ（1942-1993）も、まだ踊れる体を持ちながらこの世を去った。

“エイズ”の流行で、人々は荒れに荒れていた。

そして今、モダンダンスは完全に死語。舞台やテレビでは機械化した人間の使い捨て文化の恐ろしさ！

思えば、日本の土方巽も他界した。生身の混沌からデーモンを掴み取り、あたりに撒き散らした三十代。肉体の反乱を、文化全般に反発の起爆剤に使った彼は、生身の混沌をそのまま衰弱させた。

「人の才能には限りがある。一生かかってやれることは一つか二つ……」と淋しく云って人の誰もが受ける死に向かった。

地に繋がれた私たち。天と地の狭間で踊らされ、やがて時が来れば  
魂は上昇して天に移行していく。体も周囲の気と光にさらされなが  
ら地に沈んでいく。

三条万里子

二〇二五年五月



著 者 三條万里子 さんじょう・まりこ

製作者 さこう かよこ

発 行 二〇二五年五月

発行者 Mariiko Sanjo Cavior [New York]

<https://marikosanjo.wixsite.com/sanjo>

## V O I C E

参考文献 三條万里子著

『イカルスのように』 21世紀 BOX



TO READ MORE

『よだかの星のように』『足跡をたどる』

『鳥』『一人のためのデュエット』

『夢は枯野を…』